

「沈まぬ太陽」を読んで

鈴木 タエ子

本書は巨大な組織権力に迎合することなく、過酷な現実を突き付けられながらも信念を貫き通し生きる、ある航空マンの物語である。

主人公の恩地元は日本を代表する企業、国民航空のエリート社員である。強く固辞したにも拘らず労働組合の新委員長に抜擢された。

その時から恩地の人生の歯車が、自身の思いとは関係なく廻り始める。意に添わない役職ではあったが誠実な人柄の恩地は、他の組合員のために、と上層部に果敢に立ち向かい、労務改善に成功する。だが、その成功は上層部から憎まれ疎まれるという、サラリーマンとしての不遇な人生を踏み出す一歩となってしまった。カラチ、ケニア……と追いやられ出世コースから外されていく。それに引き換え、かつては国民航空社員としての理想に燃え同じ夢を語り合った同期の行天四郎は、早々に組合を脱会、出世コースを昇って行った。ここに、人間社会の不条理さとその危険性を憂慮する著者の危惧の念が伝わって来る。上司の思惑にばかり目を

向ける人間の重用は、他の社員のやる気を削ぎミスを誘発する、とおしえる。国民航空も当然の結果のように、航空史上最大と言われる墜落事故を起こしてしまったのである。救援隊の責任者を命じられた恩地は、ここでも遺族側に寄り添う対応で上層部と対立するのであった。そんな最中、政府は国民航空のトップ入れ替えを決断。外部から国見正之を社長に要請した。だが、名誉欲に捉われない国見は社長職を頑なに固辞する。しかし、三顧の礼を以て頼み込まれ、無報酬の会長ならば、と引き受けた。この人選により、恩地の運命も大きく変わる。人格が人格を引き寄せるように、国見は恩地を会長室部長に抜擢したのである。国見と恩地の出会いは、期せずしてお互いが最も望んでいた者同士の出会いとなった。一人より二人で頑張れることの心強さ、恩地は国見の右腕として東奔西走する。しかし、清廉なる頑張りに策を弄した邪魔が入れば「良貨を駆逐する悪貨」の如く前途を妨げる。会社のためより己れの野心や利益のみに捉われる輩。他を悪用することへの呵責など微塵もない。上にへつらい着々と野心の階段を昇って行った行天四郎もまた、その一人である。利用される側の心を踏みにじり恨みを買うのであった。行天は運輸省官僚の意を受

け、その愛人を住まわせるためのマンション探しに奔走する。しかも、愛人用経費捻出のため架空会社を創設。社長には、心を病み休職を繰り返していた国民航空社員の細井守を据えた。行天は細井をマリオネットの如く操り高圧的な言動を繰り返すのであった。細井が大学ノート八冊に、勤務内容を克明に記録していたとは露知らず……。社長とは名ばかりの、実態は愛人宅の管理人だったと知った時、細井の怒りは沸点に達した。追い詰められ最後の決断をした細井は、愛人宅の間取り図と男物の靴の特徴を、動かぬ証拠として描きノートを投函した。宛先は東京地検特捜部である。弱い人間が最後に見せた、精一杯の正義であり報復であった。そして、自らの命を絶ったのである。

政界のトップまで巻き込んだ国民航空の腐敗。追い詰められた上層部は新聞記者を丸め込み、国民航空の良心、ともいえる国見会長の失態を捏造、歪曲記事を書かせる。国見会長辞任と恩地のアフリカへの再左遷により、邪魔者がいなくなったと喜ぶ腐敗者たち。自殺した細井守の告発ノートが、特捜部の手に握られているとは知る由もない。国民航空と運輸官僚の贈収賄罪が立証され逮捕者が出るのは、目前に迫っていたのである。

恩地元と行天四郎、始まりは同じなのに大きく違ってしまったその生き方に戒められる。

読み終わった今、「目の前に二つの道を提示されたら、どちらを選択するのか。行天四郎にならない自信はあるか」と問われている気がした。他の組合員に寄り添い続けた恩地でさえ妻子を想うたび心が揺れたのである。葛藤する心がどちらに着地するか、その着地を誤ってはならないと諭されている。この物語にはモデルとなった人物がいるという。その人の存在を知った時の著者の感動が、使命感と共にこの大作を生んだ原動力となったのでは、と思われてならない。組織の悪弊に迎合しない勇氣、そして他を思いやる心と良心を見失わない人間性に引き込まれる。上司の甘言に惑わされない恩地の強い心は、読む者に力を与え叱咤激励する。弱いがために後悔を繰り返してきた私には、なおさら心に響いた。

読み終えて、改めて広大な自然界へと想いが膨らんだ。野心と保身に汲々としている人間の矮小さに比べ、自然の営みの何と偉大であるか。恩地がサバンナで遭遇した「沈まぬ太陽」はその象徴のように、これからも信念を貫き生きよ、と励ましている。人は自然を畏れ自然に教えを請い、跪かなければならない――。

今は亡き著者の心の叫びが聞こえるようだ。それはまた、行天四郎になるな、恩地元になれよ、と聞こえてならないのである。